

運転免許自主返納に関する半構造化インタビューより考察

高齢者の自動車運転への予防的支援を考える 2報

竜王真紀（甲賀市）

【はじめに】

高齢者ドライバーによる交通事故対策は極めて現代的な喫緊の課題でありながら、過疎化する地域では高齢者の自動車運転は生活に根付くものであるため、即免許返納ではなく、安全に自動車運転を続けられるための個人への取り組みは1報で示した。

しかしながら、高齢者の自動車運転免許返納については、返納したことによる精神的な落ち込みや閉じこもりへの危険も少なくないと言われる。

今回、Y地域で令和元年5月に後期高齢者に自動車免許の返納について根来氏¹⁾らと行なったインタビューをもとに、どのようにすればスムーズな免許返納へ移行できるかを考え、過疎地域の課題解決案を提言に繋げることを目的とする。

【地区概況と対象】

本調査のY地区は、人口は808人、65歳以上高齢化率は44.3%、後期高齢化率22.4%で、集落によっては高齢化率は69%を超えている。土地の傾斜もあり、交通が不便な地域であるために、後期高齢者の54.5%が自動車を運転している。

【調査方法】

① 免許返納に関する半構造化インタビュー
(時期)令和元年5月12日 (方法)自宅訪問
(対象)Y地区の免許返納者の後期高齢者2名と家族
Y地区の免許保持者の後期高齢者3名と家族
(内容) a)免許返納のきっかけ b) その後の不便さ
c)免許返納は考えているか d) 家族の受け止め
e) 若い頃の仕事、地域での役割

② 後期高齢者の自家用車運転と足の衰えの自覚・運動習慣の実態調査
(時期)令和2年9月
(対象者)Y地区後期高齢者 154名
(調査内容)「Y地区自治振興会への要望」の項中の、自家用車の運転や交通手段に関する意見を抽出

本調査は、地域課題の解決のための調査であり、個人情報保護し人権に配慮することを書面で伝え同意を得て実施している。

【調査結果】

①半構造化インタビュー

本人の思い	家族
免許返納者 A氏 85歳男性 a)2年前に息子に「もう返したらどうか」と言われた。 b)家族に迷惑かけたくない	d)家族が買い物に連れてくれるようになった。返納してくれて良かった。
免許返納者 B氏 88歳男性 a)自分は運転の仕事をしてきたが、80歳の時に自分で危ないと思ったから自分から返納した。 b)納得している。 e)若い頃は運転手をしていた。	d)80歳過ぎたらフラフラしてきたし、物忘れもあったから仕方ない。今まで頑張ってきたからな。
免許保持者 72才男性 c)事故を聞くと、自分もそろそろと思うが、もう少し乗っていたい。	
免許保持者 83歳女性 c)バスなどがないので、どこにもいけないから乗っています。	d)別居の子どもから「返納しろ」とは言われていません。
免許保持者 81歳男性 c)免許返納したら「生活がつまらなくなる」と思います。	

5名とも、「若い頃はよく頑張った」と若い頃の話を楽しそうにされた。特に男性は仕事の話をした。

②後期高齢者の暮らしの困りごと

- ・いずれ運転できなくなったらバスを利用したいでもバスの本数が増えてくれないと困るな
- ・今まで買い物や通院に車を運転していた。家族に言われて免許返納したので自由にいけなくなった。
- ・1人暮らしは車に頼るしかない。なかなか子どもたちには頼めないな
- ・今は週に2、3回は車を使っている。車がなければどうなるだろうか。不安
- ・学区のグランドゴルフ場へは仲間での乗り合い、危ないけどな。

【考察】

矢野ら²⁾は、「運転免許“自主”返納の意思決定プロセスにおいて、《自分》が事故リスクを抱えた《身体》として内在化された場合、《自分》は、喪失された《自主》返納は周囲の意見に折れる形で決定されるが、《自分》の過去の人生経験に照らして《再評価》された場合は、《自分》を社会の中で実現する手段として、返納の判断は積極的に行なわれている」と報告している。

第1報では、「身体の衰えや認知機能の低下を自らが気づく体力測定の定期的な機会が必要」と結論付けたが、矢野氏の先行研究と今回A氏、B氏のインタビュー「若い頃はよく頑張った」「これから家族たちにも迷惑かけたくない」の発言を受け、自分の人生を肯定的に振り返ることは、残された人生や家族のための「自主返納」への選択に繋がるということに気付いた。

現在では、免許が取れる年齢に達したら当然のように免許を取りに行くが、日本の高度経済成長を支えてきた団塊世代以前の方々にとって自動車運転免許の取得と自家用車を持つことは、希望や夢、誇りであったのではないだろうか。通勤、農作業、育児、家事、娯楽、交流等人生のライフステージの中で社会とのつながりを持ち、自分が一番輝いていたステージを支えてくれた“車”を手放す、免許を返納することについては、「自分が自分でなくなっていく」「自分はもう役割を果たせなくなった」といった落胆や心理的ダメージは予測できる。それを最小限にし、免許返納への意思決定を支援するには、周囲のものが、これまで頑張ってきた背景も含めた高齢者の尊厳を守る姿勢と、返納後も高齢者が排除されず社会との関係性を再構築するための支援であると考えられる。

また、免許返納した際の家族や地域の支えも免許返納への自己決定を促すものとも考えられる。今後、インフラ整備、地域の体制整備への保障の提言をしつつ、実態把握につとめ対策を講じていきたい。

【引用文献・参考文献】

- 1) 根来信也ら Y地区における高齢者の運転免許に関する半構造化インタビュー 2019. 5
- 2) 矢野真沙代ら 運転免許“自主”返納の意思決定プロセスにおける質的研究 公衆衛生誌 2020. 67. 11号